

生長の家環境マネジメントシステム 2019年度 環境パフォーマンス報告書



ISO14001国際規格に基づき、2019年度（1月～12月）の生長の家教団における環境パフォーマンスを報告いたします。

発行：2020年12月15日

作成：宗教法人「生長の家」 国際本部環境共生部

担当：環境共生部（桜井、山崎）

問い合わせ先：山梨県北杜市大泉町西井出8240番地2103

TEL：0551-45-7747（直通）

教団としての啓発活動

生長の家では、2017年度からスタートした「“新しい文明”の基礎を作るための3カ年計画」の運動方針のもとに、布教活動を計画的に展開する中で、多くの人々に自然と人間との一体感を深めてもらい、地球環境問題の解決に貢献する生き方を推奨しました。

新年のビデオメッセージで



2019年1月1日、谷口雅宣・生長の家総裁の新年のビデオメッセージを、生長の家公式サイトで一般に公開。総裁はメッセージの中で、幸福実現のために人間が自然を破壊してきた“古い文明”に対し、自然と人間がともに繁栄する“新しい文明”のライフスタイルとして、信仰に基づく倫理的な生活者の“3つの実践”を提唱。これを具体的、組織的に展開する「SNIオーガニック菜園部」「SNI自転車部」「SNIクラフト倶楽部」への参加を呼びかけられました。同ビデオは、英語、ポルトガル語、中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語の6言語の字幕入り動画も同時に公開されました。

講習会、練成会、講演会等で



谷口雅宣・総裁、谷口純子・白鳩会総裁を講師とする生長の家講習会が、30教区107会場（映像配信の90会場を含む）において開催され、約8万人が参集。その他、本部直轄練成道場、教化部における練成会（合宿形式で教えを学び実践するつどい）、教区での講演会、誌友会（教えを学ぶ小集会）が開催され、それらの行事の中で環境保全に関する啓発が行われました。

写真：生長の家講習会（2019年3月24日、山口・広島両教区）のメイン会場・山口県周南市文化会館

書籍、月刊誌で



谷口雅宣・総裁著の『凡庸の唄』『神さまと自然とともにある祈り』（共に2018年刊）、谷口純子・白鳩会総裁著の『46億年のいのち』（2019年刊）等の書籍の頒布を通じて、自然と人がともに繁栄する“新しい文明”のライフスタイルへの転換を促しました。また、生長の家の組織会員向けの機関誌『生長の家』、一般向けの月刊誌『いのちの環』（総合誌）『白鳩』（女性誌）『日時計24』（青年誌）に、毎号、環境保全に関する記事を掲載しました。

写真：月刊誌『いのちの環』『白鳩』『日時計24』（各2019年1月号）

PBS（プロジェクト型組織）の活動を通して

生長の家では、人間の欲望追求のために自然を破壊し、地球温暖化による気候変動を引き起こしている“古い文明”から、自然の繁栄が人間の繁栄となる“新しい文明”への転換を促すために、PBS（プロジェクト型組織、以下の3つの組織）によってその価値観とライフスタイルを生活の中で実践し、ミニイベントの開催やインターネット上のFacebookなどのSNSを使って広める活動に取り組みました。

SNIオーガニック菜園部で



SNIオーガニック菜園部は、「ノーミート、低炭素の食生活」を実践し、普及するPBSです。メンバーがノーミートの食生活を心がけることはもちろん、野菜や穀物については、有機農法によってベランダや家庭菜園で自ら栽培することに挑戦し、それらを収穫し食すことで、地域と季節に即した自然の恵みの有難さを味わい、地域の人々とも共有しています。

また、購入する食材は、有機無農薬で、地産地消・旬産旬消、フードマイレージの低いものを選ぶことを勧めています。

写真：借りている菜園で大根の肥料やりや草刈りを行うミニイベント。（2019年11月、京都府）

SNI自転車部で



SNI自転車部は、「省資源、低炭素の生活法」を実践し、普及するPBSです。自転車はガソリン車の燃料となる化石燃料を使わず、CO2を排出せずに移動できる大きなメリットがあります。この自転車を生活の中で活用することで、二酸化炭素の排出を抑制し、地球環境保全に大きく貢献することができます。

また、上達する喜び、風を切って走る爽快感は子供も大人も、国も超えて世界共通です。自転車の利用で心豊かで健康的な毎日を送ることができ、その意義と楽しさを世界に伝えることによって世界平和を目指しています。

写真：ヒルクライム（自転車による登坂競技）のミニイベントを開催。（2019年3月、茨城県）

SNIクラフト倶楽部で



SNIクラフト倶楽部は、「自然重視、低炭素の表現活動」を実践し、普及するPBSです。メンバーは、箸や写真立て、小物入れ用のポーチなど、生活の中で手にする身近なモノを、自分の手でつくっています。モノづくりに欠かせない“素材選び”は、木材なら国産材、植物や動物から分けてもらえる天然繊維の糸や布など、自然重視の選択をします。安く・早く・楽に手に入る大量生産、大量消費の消費生活から、身の回りのモノを大切に生かす、ていねいなライフスタイルを広めています。

写真：シュロの樹皮を材料に、ほうきを作るミニイベントを開催。（2019年6月、奈良県）

インターネットでの啓発、家庭での取り組み

生長の家では、インターネットによる情報発信力を高めるため、公式サイトのリニューアルを実施しました。生長の家の会員、信徒には、信仰に基づく倫理的な生活者として、自然と人間が調和した“新しい文明”の実現を目指して、低炭素なライフスタイルへの転換を進め、地球環境問題の解決に貢献する生活実践に取り組みました。

インターネット、ラジオ放送で



生長の家公式サイトをリニューアルし、低炭素のライフスタイルの普及とそれを実践するPBSの活動を前面に打ち出しています。

また、毎週日曜日（一部の局では土曜日）の早朝に、ニッポン放送をはじめ、全国9局で生長の家本部講師（補）によるラジオ放送番組（講話）をオンエアしました。毎月の放送回のうち1週の講話は「環境」をテーマとして啓発を行いました。同番組はインターネット上のYouTubeでも公開され（毎週日曜日に公開）、ユーザーがパソコン、スマートフォンで、いつでもどこでも視聴できるようにしています。

写真：生長の家公式サイトトップページ

『日時計日記』と「生活の記録表」の活用をすすめる



『日時計日記 2019年版』
(B6判 上・下巻)



「生活の記録表」
(2019年版、A5判)

谷口純子・白鳩会総裁監修の『日時計日記 2019年版』（生長の家刊）を活用して、その日の「環境に配慮したこと」の記載や毎月の記録コーナーで「生活の記録表」と同じ内容の記録表を用いて記載することを推奨しました。

会員、信徒などを対象に「生活の記録表」（生長の家国際本部発行、43,000部）を活用し、電気、ガス、水道、灯油、ガソリンの消費量とCO2排出量を記録し、自宅に太陽光発電装置を設置している場合には、その売電量に見合うCO2削減量も加算することにして、前年と比較してCO2排出量の削減することに取り組みました。また、2016年4月からの電力の自由化に伴い、原発や火力由来ではなく、環境負荷の少ない再生可能な自然エネルギーからの電力の調達比率が高い新電力（PPS）を選択することを推奨しました。「生活の記録表」の配布によるCO2排出削減の取り組みは2001年度から継続しています。

自然災害への救援活動に取り組む

生長の家では、地球温暖化の防止のために環境保全活動に取り組むだけでなく、地球温暖化の影響によって頻発する自然災害に対して、近隣の2教区で結んでいる「災害時相互支援協定」に基づいて救援活動を行ったり、PBSでは、インターネットを使った情報の収集、自転車を利用した移動、栽培した野菜の提供や炊き出し、救援用備品の製作など、それぞれの持ち味を生かして、迅速な支援に貢献しています。

フェスタを中止し、救援活動に

2019年10月12日に上陸した台風19号の記録的な豪雨による災害に際し、国際本部は、10月19から20日に開催予定だった「生長の家自然の恵みフェスタ」を急遽中止し、被害が大きかった長野県長野市と福島県郡山市に国際本部職員で編成した救援チームを派遣し、当該教区をはじめ、ペアを組む近隣教区の信徒、PBSのメンバー等と共に、災害ボランティア活動を実施。長野市には、谷口雅宣・生長の家総裁、谷口純子・白鳩会総裁も救援活動に加わりました。

長野県長野市で救援活動



千曲川の氾濫に伴い、宅地に浸入した汚泥の搬出作業に取り組む

福島県郡山市で救援活動



一般のボランティアと一緒に、ヘドロ状になった泥をかき出す



土嚢袋を使って庭の泥を搬出する国際本部の支援チーム



市の職員と共に、生長の家会員宅近くの高齢者宅から家財や畳を運び出す国際本部職員

自然エネルギー拡大運動を推進

生長の家では、人類社会が自然エネルギーを全面的に利用することによって「脱原発」と「地球温暖化の抑制」を実現し、自然と人間がより調和した生き方を実現することを目的として、自然エネルギー拡大運動を展開しています。

自然エネルギー拡大募金を継続



2014年7月1日から開始した「生長の家自然エネルギー拡大募金」では、2019年度は、5,182口、51,820,000円（2019年1月1日～12月31日）の募金が集まり、累計金額では519,890,000円となりました。

2017年からは、現地の太陽光パネルには寄付者名（希望者）を銘板に掲示することに加えて、日本語版ウェブサイトでも寄付者名を閲覧できるようにしました。

写真：自然エネルギー拡大募金のウェブサイト
<https://www.jp.seicho-no-ie.org/naturalpower/>

大分・別府地熱発電所が竣工



生長の家自然エネルギー拡大運動の一環として、大分県別府市に教団初の地熱発電所が竣工。先に建設された、「生長の家京都・城陽メガソーラー発電所」「生長の家福島・西郷ソーラー発電所」に続く3カ所目の発電所となりました。発電出力は49kW、年間予想発電量は、34.5万kWh。地熱発電は、24時間発電できるため、設備利用率は80%以上で、12%程度の太陽光発電より効率よく発電ができます。

写真：生長の家大分・別府地熱発電所（別府市）

自然エネルギー利用への助成



自然エネルギーの利用を促進するために、組織会員を対象に、太陽光発電・小型風力発電装置、リチウムイオン蓄電池、電気自動車の導入に際して、助成金を支給しています。

【2019年度の助成の実績】

- ◆太陽光発電装置の導入件数
18件：助成金額 1,814,000円
※発電出力1kWあたり2万円
- ◆電気自動車の導入件数
7件：助成金額 2,072,000円
※1台上限30万円、本体価格の10%まで
- ◆リチウムイオン蓄電池の導入件数
11件：助成金額 876,000円
※1kWhあたり1万円

“炭素ゼロ”運動の成果

生長の家では、2007年度から教団の活動に伴うCO2排出量を実質的にゼロにする“炭素ゼロ”の運動を展開してきました。過去12年間で進めてきた“炭素ゼロ”の運動は、ISO14001の取り組みによる継続的改善などによって2019年度も成果を上げることができました。

主要3事業所が13年連続で達成



2019年度の主要3事業所（国際本部、総本山、宇治別格本山）におけるエネルギー起源8項目（電気、都市ガス、LPガス、灯油、A重油、ガソリン、軽油、上下水道）のCO2排出量、並びに職員の出張・外勤の移動や本部主催の行事参加者の移動に伴うCO2排出量は、2007年度から13年連続で“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量 1,121,719.2 kgCO2
炭素相殺量 -2,386,022.8 kgCO2
総合計 -1,264,303.6 kgCO2

写真：宇治別格本山（京都府宇治市）が京都府綾部市に建設したメガソーラー発電所（1,255kW）

他61事業所も“炭素ゼロ”



2019年度の国内の事業所（教化部・練成道場）計61カ所におけるエネルギー起源8項目等のCO2排出量は、昨年に続き、排出権を購入することなく相殺することができ、“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量 1,473,599 CO2kg
炭素相殺量 -1,483,708 CO2kg
総合計 -10,109 CO2kg

※炭素相殺量とは太陽光発電の売電分、森林吸収分、自然エネルギー拡大募金による削減分などによって見込まれる炭素削減量のこと。

写真：岡山県教化部会館（岡山市）の太陽光発電装置（50kW）

省エネ、再エネ利用による削減



左記の“炭素ゼロ”の達成の要因としては、各事業所の省エネの取り組みが着実に進んでいること、電力購入先をCO2の排出係数の低いPPS（新電力）へ切り替えていること、事業所の太陽光発電の発電による炭素削減効果、一部の事業所が所有する森林のCO2吸収量による炭素削減。加えて、メガソーラー・大規模ソーラーの発電による炭素削減量（次頁参照）を、各教区からの自然エネルギー拡大募金の口数に応じて配分したことなどが奏功しています。

写真：福島・西郷ソーラー発電所（福島県）

“炭素ゼロ”運動の成果

生長の家の京都・城陽メガソーラー発電所、福島・西郷ソーラー発電所、及び国内の事業所の太陽光発電装置によって、二酸化炭素排出削減が進み、教団全体の“炭素ゼロ”達成に大きく貢献しています。こうした国内の太陽光発電装置だけでなく、海外を含めた発電出力を合算すると14メガワットを超えており、生長の家国際太陽光発電所（仮想）と名付けて啓発を行っています。

大規模ソーラーの炭素削減量



826世帯分 杉89,602本分

生長の家が建設した京都・城陽メガソーラー発電所（2015年3月稼働）、福島・西郷ソーラー発電所（2015年12月稼働）の2カ所の2019年度の発電量は以下の通りとなりました。

【2019年度の発電量】

京都・城陽メガソーラー発電所：1,870,022 kWh

（一般家庭の約674世帯分に相当）

福島・西郷ソーラー発電所：903,939 kWh

（一般家庭の約310世帯分に相当）

両発電所の発電量の合計：2,773,961 kWh

（一般家庭の約984世帯分に相当）

両発電所によるCO2削減量の合計：1,254,429 kgCO2

（杉の木の年間CO2吸収量に換算すると89,602本分に相当）

太陽光発電全体の炭素削減量



2,441世帯分 杉264,714本分

2019年度、太陽光発電装置を設置しているのは56事業所、101カ所。総発電出力は約7,409.8kWに上り、年間に約741万kWhを発電し、約3,706トンのCO2を削減しました。

（各発電量はNEDOによる推定値を採用）

【56事業所の内訳】

本部関係：国際本部（左掲の大規模ソーラーを含む）、総本山ほか3事業所

教化部：50事業所（全教化部は59）

関係団体：（一財）世界聖典普及協会

※1kW当たり年間推定発電量：1,000kWh（NEDOの資料より）

※CO2削減量の算出根拠：（電力排出係数は、環境省・経済産業省公表の全国平均値0.500を採用）

太陽光発電の仮想発電所で啓発



生長の家では、国内外の事業所だけでなく、国内の組織会員、海外の聖使命会員が設置している太陽光発電装置の発電出力を合算して表示する仮想発電所を「生長の家国際太陽光発電所」として、その発電出力の総合計を、組織会員向けの機関誌、一般向けの3種の月刊誌に掲載して、自然エネルギーの拡大を啓発しています。

2019年11月15日の発電出力：14,484.83kW

（前年比+58.51kW）

写真：一般向け月刊誌3誌に毎号掲載している「生長の家国際太陽光発電所」の例

森林保全活動への寄付と飢餓救済のための募金活動

生長の家では、森林の減少を少しでも食い止めるため、WWFジャパンによる森林保全活動に寄付を行って支援をしています。また、国際本部“森の中のオフィス”では、飢餓救済を目的とし、毎月1回、食堂利用者に提供される昼食を、一杯のご飯と味噌汁だけにする「一汁一飯（いちじゅういっぱん）」に取り組み、WFPへの寄付を実施しています。

WWFの森林保全活動に寄付



生長の家では、WWFジャパンによる「インドネシア森林保全プロジェクト」に寄付しました。日本国内で継続している「生物多様性保全募金」の全額、及び①谷口雅宣・総裁の著書（谷口純子・白鳩会総裁との共著を含む）の益金の一部と、②生長の家の月刊誌3誌の森林寄付金（1誌に付1円）分から200万円を含め、2019年度は総額4,080,946円でした。この寄付金は、インドネシアのスマトラ島の2つの国立公園周辺及び、ボルネオ島の3つの州において、熱帯林を保護するためのパトロール、植林、調査活動、地域住民への環境教育の実施などに役立てられています。

写真：森を守る次世代を育てる環境教育の実施

「一汁一飯」で飢餓救済に寄付



生長の家国際本部“森の中のオフィス”の職員食堂では、2014年4月から、環境問題は資源や飢餓の問題と密接に関係しているとの観点から、世界の飢餓に苦しむ人々に心を寄せ、毎月1回「一汁一飯」の日を設け、減らした食材費で1食300円を寄付する活動を始め、取り組みは生長の家の世界の各拠点に広がっています。2019年度の寄付金額は208,500円（695食分）になり、民間協力の窓口である認定NPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付をしています。

写真：一杯のご飯と味噌汁だけの「一汁一飯」

クリック募金で飢餓救済に寄付



生長の家の産業人の組織である生長の家栄える会では、同会公式サイトで「飢餓救済クリック募金」を運営し、ユーザーがクリックをすると、協賛している企業等より、毎月そのアクセス数に応じた金額がNPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付され、飢餓に苦しむ人々に食糧が届けられる仕組みを作り、活用しています。2019年度の寄付金額は71,418円（協賛企業16社）となりました。

飢餓救済クリック募金

<http://www.jp.seicho-no-ie.org/kiga/index.html>

オフィスの見学者への啓発

教団外への啓発活動として、“森の中のオフィス”では、一般の見学者を受け入れ、「万教包容の広場」などの宗教施設、ZEBの設備やオフィスでの活動とともに、その背景にある教えを紹介して、環境保全の啓発を行っています。

大学教授、宗教者、オーガニック農業家、行政関係者などが来訪

ブラジルの生長の家青年会員のカンピーナス大学の講師（右）と、東京農工大学大学院の教授（左）が“森の中のオフィス”を見学。



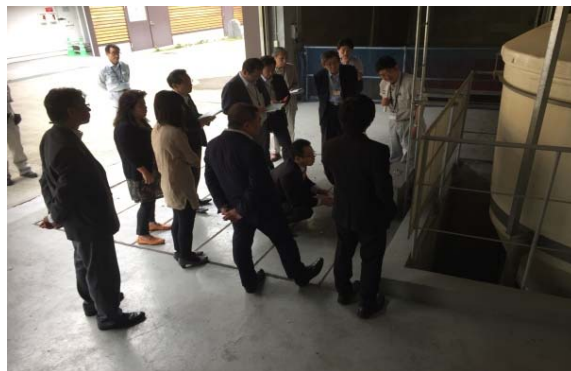
立正佼成会青梅練成道場の食堂スタッフが見学。オフィスの食堂スタッフと、調理のシステムやノーミート料理などで意見を交換しました。



オーガニック衣料会社の社長、オーガニック農業普及のための団体の代表、有機栽培農家など13名が見学後、SNIオーガニック菜園部と懇談。



山梨県西桂町の職員やバイオマス発電機メーカー社員らが来訪。森林資源を有効利用するバイオマス発電の運用実績に関心が集まりました。



「世界宗教者平和会議（WCRP）」の女性部会のメンバーら18名が来訪。見学の後、懇談会で感想発表や質疑応答を行い、交流を深めました。



オフィス内の「本とクラフト こもれび」で、見学者が生長の家の書籍やSNIクラフト倶楽部メンバーの手作りの作品を買い求める姿も。



ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）の成果

生長の家の“森の中のオフィス”は、国内で初となるZEBとして建設され、運用段階での年間のエネルギー消費量を省エネルギーによって極力削減し、太陽光発電やバイオマス発電による創エネルギーで、実質ゼロにするものです。このコンセプトを国内の教化部会館などの建て替えに順次適用させています。

“森の中のオフィス”（山梨県北杜市）



生長の家“森の中のオフィス”

2019年度の“森の中のオフィス”の電力量年間集計では、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを7年連続で達成しました。

年間の発電量579,341kWh、使用量433,531kWh、買電量82,352kWh、売電量は228,162kWh。なお、電力の自給率は81%でした。※PEB（ポジティブ・エネルギー・ビルディング）

メディアセンター（山梨県北杜市）



生長の家メディアセンター

2019年度のメディアセンター（出版・広報部門のオフィス、スタジオ兼ギャラリー）の電力量年間集計では、“森の中のオフィス”同様、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量55,630kWh、使用量24,857kWh、買電量15,595kWh、売電量は46,368kWhでした。

原宿光明の塔（東京都渋谷区）



生長の家原宿光明の塔

2019年度の原宿光明の塔（旧国際本部会館の一部を教団の歴史的建造物として残した建物）の電力量年間集計では、発電量37,529kWh、使用量26,169kWh、買電量11,443kWh、売電量22,803kWhとなり、ZEBを越えてPEBとなりました。

茨城県教化部（茨城県笠間市）



生長の家茨城県教化部会館

2019年度の生長の家茨城県教化部会館は、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量56,816kWh、使用量26,931kWh、買電量17,003kWh、売電量は41,401kWhでした。